

抗がん剤の副作用について No. 4

皮膚障害・脱毛

はじめに

抗がん剤の副作用によりおこる皮膚障害や脱毛は、生命に重大な影響を及ぼすことが少なく、他の副作用と比較すると軽視されがちです。また、患者様も、少し爪が変形したり皮膚がかさかさしても、主治医等に伝えることなく耐えながら、治療を継続されていることがあります。

そこで、今回は、皮膚障害・脱毛について紹介します。



皮膚障害

皮膚障害としては、かぶれ、赤み、かゆみ、蕁麻疹、かさつき、皮膚や爪の黒ずみ及びはがれ、爪の変形、光過敏症（光の刺激に弱い）、注射部位の腫れや痛みなどがあげられます。この様な症状があれば、主治医等に伝えましょう。

皮膚障害はなぜ起こるのでしょうか？

皮膚障害は軽度のものから重篤なものまであり、原因もさまざまです。

(1) 抗がん剤の作用機序に関するもの

一般的に抗がん剤は、異常増殖するがん細胞を殺しますが、がん細胞のみでなく、皮膚や爪などの正常細胞にも障害を与えます。その結果、弾力がなくなる、かさかさする、はがれる、黒ずむ、皮膚が薄くなり傷つきやすい、傷が治りにくいなどの症状がおきます。

(2) 抗がん剤に対するアレルギー反応によるもの

抗がん剤が投与されたことにより、ヒスタミンをはじめとする血管の収縮・弛緩などアレルギー反応に関する物質が分泌され、皮膚の赤み、蕁麻疹などが起こります。これは、抗がん剤投与開始から72時間以内に生じ、即時型のアレルギー反応と言われます。

その他、リンパ球の反応が引き起こされ、接触性皮膚炎などの皮膚炎が生じたり、皮膚が黒ずむ、弾力がなくなる、光の刺激に弱くなるなどの症状がおきます。

(3) その他のもの

以前、放射線治療を行った部位が赤くなったり発疹が生じることがあります。
また、注射部位が腫れる、痛むなどの症状を引き起こすことがあります。

皮膚障害（皮膚・爪）の治療にはどのような方法がありますか？

治療に使われるお薬としては、抗ヒスタミン薬、抗アレルギー薬、ステロイド薬、保湿剤・皮膚保護剤などの軟膏やクリームがあります。

日常生活では、手袋の着用、刺激の少ない石鹸を使用しての入浴・シャワーなど、皮膚を清潔に保つ工夫が有効です。

脱毛

脱毛はなぜ起こるのでしょうか？

人の体毛は、毛母細胞の分化によって成長します。この細胞は、正常細胞の中でも、特に細胞分裂が活発で、抗がん剤の作用を受けやすいため、障害を受けて脱毛をきたします。一般的に脱毛は、抗がん剤投与開始から2～3週間後に始まることが多く、最終の抗がん剤投与から3～6ヶ月後には再び生えてきます。生えかわった髪の毛は、色や質が変わることがあります。

脱毛をきたす抗がん剤にはどのようなものがありますか？ ()は商品名

90%～50%

パクリタキセル（タキソール注）ドセタキセル（タキソテール注）エトポシド（ラストテクト注）エピルビシン（ファルモルビシン注）ドキシソルビシン（アドリアシン注）イダルビシン（イダマイシン注）イホスファミド（イホマイド注）イリノテカン（カンプト注）

50%～20%

ビンクリスチン（オンコビン注）アクチノマイシン（コスメゲン注）ブレオマイシン（ブレオ注）シクロホスファミド（エンドキサン注）ペプロマイシン（ペブレオ注）

脱毛に対する準備と脱毛が始まったらどうしたらいいのでしょうか？

（脱毛前）

- ・ 毛髪の長い方は、あらかじめ短くカットしておくとう脱毛後の手入れが楽になる場合があります。
- ・ 脱毛が進む前に、かつら、帽子などを準備しておきましょう。

（脱毛が始まったら）

- ・ 洗髪の回数を減らし、シャンプーは中性のものを使用しましょう。脱毛を恐れてまったく洗髪をしなくなるのは、頭皮の刺激不足や不潔になりかえって逆効果です。
- ・ ブラシは、柔らかくて目の粗いものを使用しましょう。サテンの枕カバーの使用もよいでしょう。
- ・ パーマをかけることは避け、ドライヤーの使用も避けた方がよいでしょう。
- ・ 頭皮に直射日光が当たらないよう工夫しましょう。
- ・ かつら、帽子、バンダナ、スカーフなど上手に利用しましょう。